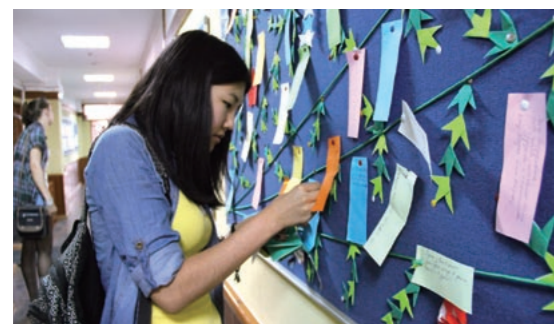


務先が海外進出を視野に入れたことに驚いた。「どんな企業で働こうと、もう国内だけを見ている時代ではないんだ」と。自分の働き方を考え直す機会になりました。それまで海外は遊びに行く場所だと思っていた。でもこれからは働く場になりたい。現地の人々の生活に溶け込んで仕事ができる青年海外協力隊は魅力的に映った。一つ不安だったのが、特別な技術がなかったこと。でも募集の中に自分にぴったりの職種を見つけた。それが、キルギスで日本文化を伝えるという活動だ。「祖母が茶道



2013年に開催した盆踊り大会。500人もの来場者が集まり大盛況だった



同僚と七夕祭りを企画。折り紙で笹を作り、センターを訪れた人に短冊を貼ってもらった

と華道の教室を開いていたので、子どものころから日本の伝統文化が身近にありました。私にもできることがあるのではと思ったのです。」

「最初は日本との感覚の違いに戸惑うことばかり。盆踊り大会では、終了時間まで30分もあつたのにスタッフが疲れたからと早く切り上げようとしたんです」と石川さんは振り返る。

そして石川さんたちに力をくれるのは、何といつてもキルギスの子どもたちの笑顔だ。インターネット電話などで日本の子どもと交流する機会をつくったところ大盛況。「キルギスの文化を紹介したいから、日本語を教えて！」「キルギスの工芸品を持って日本に送るの」。日本に関心を持ってもらえただけでなく、自分の国の文化をあらためて見直すきっかけにもなっている。

2年間で見つけた自分なりの国際協力

キルギスの街中を走る車の7割は、日本の中古車。だからといって、日本文化が広く知られているわけではない。そこでセンターでは両国の交流を促進するために、ひな祭りや盆踊り、餅つき、書き初めなど年6回の年中行事の他、茶道や書道などを教える日本文化講座を定期的に開催。市内の学校や企業などに出張し、日本文化を教えることもある。年間のスケジュール

ユール管理や個々のイベントの企画・実施など、やるべきことは盛りだくさんだ。

こうした活動は石川さんにも変化をもたらした。「小さな交流から、日本人はキルギス人を、キルギス人は日本人を身近な存在として大切にするようになります。そのお手伝いをするのが、私なりの国際協力だと思えるようになりました」。石川さんの思いが人を育て、国境を超えて人を結び付けている。

日本文化講座で茶道を教える石川さん(左)。毎回10人ほどが参加

キルギス
from KYRGYZ



人と人を結ぶ懸け橋に

青年海外協力隊

中央アジアにある山と草原の国キルギス。この国と日本の橋渡しをしたいと活動するのが、青年海外協力隊員の石川敦子さんだ。現地の人たちと共に見つけた彼女なりの国際協力とは――。

海外で働きたい！ 新しい道に挑戦

赤いちょうちんが揺れ、太鼓の音が響く。そのリズムに合わせて、みんなが輪になって楽しそうに踊っている。日本の夏の風物詩、盆踊り大会だ。

しかし、ここは日本ではない。カザフスタンやウズベキスタンなど国境を接する中央アジアの国、キルギスだ。主催したのは、首都ビシュケクにあるキルギス共和国日本人材開発センター*。1995年に日本の支援で設立され、ビジネス人材を育成したり日本文化を発信したりと、両国をつ

なく拠点となる場所だ。「キルギス人と日本人は驚くほど見た目がそっくり。街を歩いても、外国人だと気付かれませんよ」と笑うのは、このセンターで活動する青年海外協力隊員の石川敦子さん。現地スタッフと共に、日本とキルギスの相互理解を促すイベントを企画・運営している。

ビシュケクに来てもうすぐ2年。ゆくゆくはセンターを現地の人がだけで運営できるように、彼らの能力を最大限に引き出せる方法を模索してきた。

協力隊への参加を決めたのは、社会人6年目。IT関係の日本企業で営業職だった石川さんは、勤



チュイ州立学校で日本文化講座を開き、子どもたちがコップでペンゴまを作成



日本文化を紹介した同僚のカネケイさん(右)は、「子どもたちが目をキラキラさせ、日本に興味を持ってくれてうれしかった」と話す

*市場経済に移行する9カ国にJICAの支援で設置された日本との交流の拠点。ビジネス人材の育成、日本語教育、相互理解促進が活動の3本柱。